



TITLE:

# Configurationについて (特異点の幾何学)

AUTHOR(S):

中村, 得之

---

CITATION:

中村, 得之. Configurationについて (特異点の幾何学). 数理解析研究所講究録 1976, 283: 43-51

ISSUE DATE:

1976-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/106075>

RIGHT:

# Configuration について

東大 教養 中村 得之

0.  $F$  を体とし,  $M = \{M_i \mid i \in I\}$  を  $F^n$  の超平面の集まりとする.  $M = \bigcup \{M_i \mid i \in I\}$  とかくとき,  $K^n \setminus M$  の位相は色々な問題に関連して知られているが, 特に  $K = \mathbb{C}$  の場合は重要であり Serre, Brieskorn, Saito, Deligne, Hattori 等により多くの結果が得られている. ここではそれらのうちのいくつかを一般化することを試みる.

1.  $F$  を実数体  $\mathbb{R}$ , 複素数体  $\mathbb{C}$ , 四元数体  $\mathbb{H}$  のいずれかとする.  $I$  を有限集合とし,  $\mathcal{V} = \{V_i \mid i \in I\}$  を  $F^n$  における原点を通る affine 部分空間の集まりとする. いま  $I$  の部分集合を単体として定義される単体的複体を  $\Delta(I)$  で表わそう. このとき, 任意の単体  $P \in \Delta(I)$  に対して, その幾何学的実現を  $|P|$  で, 部分複体  $K \subset \Delta(I)$  の幾何学的実現を  $|K|$  で表わすことにする. 単体  $P \in \Delta(I)$  が与えられたとき,  $V_P \subset F^n$  を  $V_P = \bigcap \{V_i \mid i \in P\}$  で定義し,  $K(P) = \dim_F V_P$  とおくことにする.

さて  $V_i^*, SV_i, PV_i$  をそれぞれ  $V_i^* = V_i \setminus \{0\}$ ,  $SV_i = \{x \in V_i^* \mid |x|=1\}$ ,  $PV_i = V_i^*/F^*$  で定義し,  $V^*, SV, PV$  をそれぞれ自然な合併  $V^* = \bigcup \{V_i^* \mid i \in I\}$ ,  $SV = \bigcup \{SV_i \mid i \in I\}$ ,  $PV = \bigcup \{PV_i \mid i \in I\}$  を表わすことにする. 次に空間  $E(V^*), E(SV), E(PV)$  をそれぞれ

$$E(V^*) = \bigcup \{|P| \times (F^{K(P)})^* \mid P \in \Delta(I)\} \subset |\Delta(I)| \times (F^n)^*$$

$$E(SV) = \bigcup \{|P| \times SF^{K(P)} \mid P \in \Delta(I)\} \subset |\Delta(I)| \times SF^n$$

$$E(PV) = \bigcup \{|P| \times PF^{K(P)} \mid P \in \Delta(I)\} \subset |\Delta(I)| \times PF^n$$

(定義しよう. このとき次のことがいえる

定理 1  $V^* \simeq E(V^*), SV \simeq E(SV), PV \simeq E(PV)$ .

証明  $P' \subset P$  をみたす  $\Delta(I)$  の任意の単体に対して,  $K(P') - K(P) \geq \dim P - \dim P'$  が成り立つとき  $V$  は退化しないといふことにする. 簡単のため  $V$  が退化しない場合の証明のあたりをしることにする.  $\pi: E(V^*) \rightarrow |\Delta(I)|$  を自然な射影とする.  $P \in \Delta(I)$  に対し,  $\hat{P}$  で  $|P|$  の重心を表わす. いま各  $P$  に対し,  $F$  上の線型な写像  $f_P: \hat{P} \times F^{K(P)} \rightarrow V_P$  を任意に一つ定める. 次に  $\Delta(I)$  の重心細分  $\Delta(I)$  の一つの単体  $\sigma = \{\hat{P}_0, \hat{P}_1, \dots, \hat{P}_p\}$  ( $P_0 \subset P_1 \subset \dots \subset P_p$ ) をとるとき  $F$  上の線型な写像  $f_\sigma: |\sigma| \times F^{K(P_p)} \rightarrow V_{P_0}$  を次のように定義する.  $\dim \sigma = 0$  のときには,  $\sigma = \hat{P}$  とかけるから  $f_\sigma = f_P$  で定義する.  $\dim \sigma = p > 0$  とし  $p$  より小さい

次の単体に対しては写像が定義されているものとする。このとき  $f_{\partial\sigma}: \partial|\sigma| \times F^{K(p_p)} \rightarrow V_{K(p_p)}$  が自然に定まる。

一方  $F = \mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{H}$  に応じて,  $U_K = O(K), U(K), Sp(K)$  とするとき,  $\pi_{p-1}(V_{K(p_p), K(p_p)}) = \pi_{p-1}(U_{K(p_p)} / U_{K(p_p) - K(p_p)})$  は  $K(p_p) - K(p_p) \geq \dim p_p - \dim p_0 \geq p$  となることから常に 0 となる。したがって  $f_{\partial\sigma}$  は  $f_\sigma: |\sigma| \times F^{K(p_p)} \rightarrow V_{K(p_p)}$  に拡張される。これから求める写像  $f: E(U^*) \rightarrow V^*$  の存在がいえることは容易にわかる。 $f$  が  $U_i$  の作用と可換であることも明らかである。

次に  $f$  がホモトピー同値を与えることを示すために、いくつかの準備をしよう。

まず,  $p \in \Delta(I)$  に対して,  $\lambda(p) \in \Delta(I)$  を  $\lambda(p) = I \setminus p$  で定め,  $U \circ p, U * p$  をそれぞれ  $U \circ p = \{V_i \mid i \in p\}$ ,  $U * p = \{V_i \cap V_p \mid i \in \lambda(p)\}$  で定義する。ここで,  $p \in \Delta(I)$  に対して  $\Delta(p)$  を  $p$  の単体的閉包,  $\iota_p: \Delta(p) \rightarrow \Delta(I)$  を  $\iota_p(\hat{p}') = \hat{p}'$  ( $p' \subset p$ ) でひきおこされる自然な移入とし,  $\hat{*}_p: \Delta(\lambda(p)) \rightarrow \Delta(I)$  を  $\hat{*}_p(\hat{p}') = p' \hat{*} p$  ( $p' \subset \lambda(p)$ ) で定義される写像とする。このとき  $\iota_p, \hat{*}_p$  はそれぞれ同型  $E(U \circ p) \cong E(U) \big|_{|\iota_p \Delta(p)|}$ ,  $E(U * p) \cong E(U) \big|_{|\hat{*}_p \Delta(\lambda(p))|}$  をひきおこすことは容易にたしかめられる。ここで  $K \subset \Delta(I)$  に対し,  $\pi: E(U) \rightarrow |\Delta(I)|$  による  $|K|$  の逆像を  $E(U) \big|_{|K|}$

で表わすものとする

ところで,  $\Delta(I)$  における  $\Delta(p)$ ,  $\Delta(\lambda(p))$  の正則近傍をそれぞれ  $N_0, N_1$  で表わすとき;  $N_0 \cup N_1 = \Delta(I)$ ,

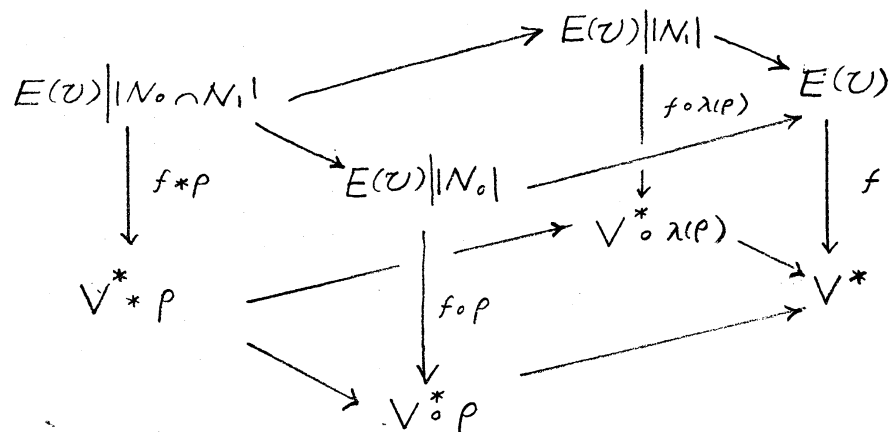
$$N_0 \cap N_1 = \hat{*}_p \Delta(\lambda(p)), \quad N_0 \searrow \subset_p \Delta(p), \quad N_1 \searrow \subset_{\lambda(p)} \Delta(\lambda(p))$$

となることはよく知られている. これから  $E(U)|N_0| \cup E(U)|N_1|$

$$= E(U), \quad E(U)|N_0| \cap E(U)|N_1| = E(U)|\hat{*}_p \Delta(\lambda(p))|, \quad E(U)|N_0| \searrow$$

$$E(U)|\subset_p \Delta(p)|, \quad E(U)|N_1| \searrow E(U)|\subset_{\lambda(p)} \Delta(\lambda(p))| \text{ が得られる.}$$

一方,  $V^*_p \cup V^*_{\lambda(p)} = V^*$ ,  $V^*_p \cap V^*_{\lambda(p)} = V^*_{\hat{*}_p}$  は明らかであるから, 次のホモトピー可換な図式が得られる



この図式を用いて,  $f: E(U) \rightarrow V^*$  がホモトピー同値であることを示そう.  $\dim \Delta(I) = 0$  のときには  $f_\sigma = f_{\hat{*}}$  の定義から自明である.  $\dim \Delta(I) > 0$  とし, これ以下の次元で写像はホモトピー同値を与えているものとする. このとき  $p = \{i\}$  ( $i \in I$ ),  $\lambda(p) = I \setminus \{i\}$  とすれば,  $f \circ p$ ,  $f \circ \lambda(p)$ ,  $f \circ \hat{*}_p$  は帰納法の假定からホモトピー同値がいえ, したがって van Kampen の定理, Mayer-Vietoris の定理により

$f$  がホモトピー同値であることを示される. 証明終

この定理により  $PF^n \setminus PV$  のホモロジーの多くの場合  
容易に計算される. それを用いて例としては次のことが示される.

系 任意の  $p \in \Delta(I)$  に対して  $\dim_F V_p = n - \dim p - 1$   
となるとき,  $\mathcal{U}$  は一般的である.  $\mathcal{U}$  が一般的  
であり, かつ  $F = \mathbb{C}$  ならば  $n \geq 3$  の条件下に次のこと  
が成り立つ.

$$PF^n \setminus PV \simeq (\bigtimes^m S^{d-1})^{(d-1)n}$$

ただし  $m = \#I - 1$ ,  $d = \dim_{\mathbb{R}} F$  とし,  $(\bigtimes^m S^{d-1})^p$  は

$\bigtimes^m S^{d-1}$  の最も経済的な胞体分割の  $p$  骨格を表わす

$F = \mathbb{R}$  の場合は上の事実を示すことは容易である.  $F = \mathbb{C}$   
の場合はこの結果は服部晶夫氏によって得られたものである.

2.  $\mathcal{M} = \{M_i \mid i \in I\}$  を  $\mathbb{R}^n$  の超平面の集まりで次の  
条件  $(C_0)$ ,  $(C_1)$  のいずれかを満たすものとする.

$(C_0)$   $I$  は有限集合で,  $M_i$  はすべて原点を通る.

$(C_1)$   $\mathcal{M}$  は  $\mathbb{R}^n$  のコンパクトな凸多面体による  $\mathbb{R}^n$  の  
胞体分割を与える.

いま, 各  $i \in I$  に対し  $\mathbb{R}^n$  上の一次式  $l_i$  で  $l_i^{-1}(0) = M_i$   
となるものを定めておく.  $\mathbb{Z}_3 = \{-1, 0, 1\}$  と考え,  $e \in \mathbb{Z}_3$   
に対し  $M_i^e = \{x \in \mathbb{R}^n \mid \operatorname{sgn} l_i(x) = e\}$  と定める. このとき,  
 $\varepsilon: I \rightarrow \mathbb{Z}_3$  に対し,  $C_0(\varepsilon) = \{x \in \mathbb{R}^n \mid \operatorname{sgn} l_i(x) = \varepsilon(i), i \in I\}$

とおく.  $C_0(\varepsilon) = \bigcap \{M_i^{\varepsilon(i)} \mid i \in I\}$  とする. ここで,  $(C_0)$  の場合には,  $C(\varepsilon) = C_0(\varepsilon) \cap D^n$  ( $D^n = \{x \in \mathbb{R}^n \mid |x| \leq 1\}$ ),  $(C_1)$  の場合には  $C(\varepsilon) = C_0(\varepsilon)$  とおき, 凸胞複体  $P(M)$  を  $P(M) = \{C(\varepsilon) \mid \varepsilon: I \rightarrow \mathbb{Z}_3\}$  で定義する. 明らかに  $P(M)$  は PL 多様体の凸胞体分割を与えるから,  $C(\varepsilon)$  の双対胞体  $D(\varepsilon)$  を  $D(\varepsilon) = \bigcup \{\hat{C}_0, \hat{C}_1, \dots, \hat{C}_p \mid C(\varepsilon) = C_0 < C_1 < \dots < C_p\}$  で定義し (差支えない. ここで  $\hat{C}_i$  は  $C_i$  の重心を表わすものとする. これを用いて, CW 複体  $R(M)$  を次のように定義しよう.

$$R(M) = \bigcup \{D(\varepsilon) \times D(\theta) \mid \varepsilon, \theta: I \rightarrow \mathbb{Z}_3, D(\theta) < D(\varepsilon), \dim D(\theta) = 0\} / \sim$$

ここで  $\bigcup$  は互に素な和集合を表わし,  $\sim$  は次の関係で生成される同値関係を表わすものとする.  $(x, y) \in D(\varepsilon) \times D(\theta)$ ,  $(x', y') \in D(\varepsilon') \times D(\theta')$  は  $D(\varepsilon') < D(\varepsilon)$  かつ  $\theta'(i) = \theta(i)$  ( $i \in \varepsilon^{-1}(0)$ ) が成り立つとき  $(l_{\varepsilon'}^{\varepsilon}(x'), y) \sim (x', y')$  とする. ここで  $l_{\varepsilon'}^{\varepsilon}: D(\varepsilon') \subset D(\varepsilon)$  は自然な移入, かつ  $y \in D(\theta)$ ,  $y' \in D(\theta')$  とする. 以下  $D(\varepsilon) \times D(\theta)$  の  $R(M)$  への像を  $X(D(\varepsilon) \times D(\theta))$  とかく.

いま  $\mathbb{R}^n$  の超平面  $M$  の複素化を  $M^{\mathbb{C}}$  と表わし, 上記の  $M$  に対して  $M^{\mathbb{C}} = \{M_i^{\mathbb{C}} \mid i \in I\}$  で定義する. また  $M^{\mathbb{C}} = \bigcup \{M_i^{\mathbb{C}} \mid i \in I\}$  と表わすとき, 次のことが成り立つ.

定理2  $\mathbb{C}^n \setminus M^{\mathbb{C}} \cong R(M)$

証明  $\mathbb{C}^n$  の実部全体を  $R\mathbb{C}^n$ , 虚部全体を  $g\mathbb{C}^n$  と書き, それぞれを  $R^n$  と同一視する. このとき, Deligne の手法を拡張して, 一般の  $M$  に対して  $\mathbb{C}^n \setminus M^c$  の次のような開被覆を考えることにする.  $\varepsilon: I \rightarrow \mathbb{Z}_3$  に対し  $O(\varepsilon) \subset R\mathbb{C}^n$  を  $\hat{C}(\varepsilon)$  の  $P(M)$  における開星状体  $\text{St}(\hat{C}(\varepsilon), P(M))$  とする. ただし,  $P(M)$  は  $P(M)$  の重の細分とする. また  $\delta: I \rightarrow \mathbb{Z}_3$  に対し  $Y(\delta) \subset g\mathbb{C}^n$  を  $Y(\delta) = \bigcap \{M_i^{\delta(i)} \mid \delta(i) \neq 0\}$  とする. ここで  $\mathbb{C}^n \setminus M^c \cong R\mathbb{C}^n \times g\mathbb{C}^n$  の開被覆  $\mathcal{U} = \mathcal{U}(M)$  を次のようにして定義する.

$$\mathcal{U} = \{O(\varepsilon) \times Y(\delta) \mid \varepsilon, \delta: I \rightarrow \mathbb{Z}_3, \varepsilon(i_0) \cup \delta(i_0) = I, \varepsilon(i_0) \cap \delta(i_0) = \emptyset\}$$

$U(\varepsilon, \delta) = O(\varepsilon) \times Y(\delta)$  とおく.  $U(\varepsilon_0, \delta_0) \cap U(\varepsilon_1, \delta_1) \cap \cdots \cap U(\varepsilon_p, \delta_p) \neq \emptyset$  となるための必要十分条件は, 適当な置換  $\omega$  と

$$C(\varepsilon_{\omega(i_0)}) \supset C(\varepsilon_{\omega(i_1)}) \supset \cdots \supset C(\varepsilon_{\omega(i_p)}) \quad \text{および}$$

$$Y(\delta_{\omega(i_0)}) \supset Y(\delta_{\omega(i_1)}) \supset \cdots \supset Y(\delta_{\omega(i_p)}) \quad \text{が同時に成り立}$$

つことである. これは  $\theta = \theta(\varepsilon, \delta)$  を  $\theta = \varepsilon + \delta$  で定義す

$$\text{るとき, } \chi(D(\varepsilon_{\omega(i_0)}) \times D(\theta_{\omega(i_0)})) \subset \chi(D(\varepsilon_{\omega(i_1)}) \times D(\theta_{\omega(i_1)})) \subset \cdots$$

$$\subset \chi(D(\varepsilon_{\omega(i_p)}) \times D(\theta_{\omega(i_p)})) \quad \text{が成り立つことと同値である.}$$

したがって,  $\mathcal{U}$  の nerve 体  $K(\mathcal{U})$  を  $K(M)$  とかくことにすれば  $K(M) \cong R(M)$  となる. ここで  $R(M)$  は  $R(M)$  の重の細分である.

一方  $\mathcal{U}$  は可縮な開集合による  $\mathbb{C}^n \setminus M^c$  の被覆



であることから,  $K(\mathcal{U})$  は  $\mathbb{C}^n \setminus M^c$  とホモトピー同型である 証明終

この応用として, 例えは次のことが証明される 各  $i \in I$  に対し  $M_i$  に関する  $\mathbb{R}^n$  の反転を  $d_i$  で表わし,  $S = \{d_i | i \in I\}$  とする.  $S$  で生成される  $\mathbb{R}^n$  の運動群の部分群を  $W$  で表わそう.  $W$  が  $P(M)$  の  $n$  次元胞体の集合の上に忠実かつ推移的に作用するとき,  $M$  を Weyl 群  $W$  の Weyl 壁の集まりとよぶ.

定理 3  $M$  が Weyl 壁の集まり,  $W$  をその Weyl 群とする. このとき

$$(\mathbb{C}^n \setminus M^c)/W \simeq R(M)/W$$

証明 定理 2 のホモトピー同値が  $W$  の作用と可換であることを用いればよい

さく  $M$  が Weyl 壁の集まりであるとしよう.  $P(M)$  の胞体  $C(\theta)$  と  $\dim C(\theta) = n$  となるものを任意に一つ定める.  $C(E_i)$  を  $C(E_i) \subset C(\theta)$  かつ  $\dim C(E_i) = n-1$  となる胞体とし, これに  $C(\theta)$  からひきおこされた向きをつける. また  $C(\delta_{ij}) = C(E_i) \cap C(E_j)$  とし  $m_{ij} = \# \delta_{ij}^{-1}(0)$ , するわけ.  $C(\delta_{ij})$  を通る  $M$  に属する超平面の数を  $m_{ij}$  とする. いま  $D(E_i)$  に  $C(E_i)$  に双対的な向きをつけ,  $\alpha_i = \chi(D(E_i) \times D(\theta))$  とする. これは  $R(M)/W$  の閉曲線を与

えることは明らかであろう。さらに  $x_i, x_j$  に関する語  $r_{ij}$  を

$$r_{ij} = (x_i, x_j; m_{ij}) \cdot (x_j, x_i; m_{ij})^{-1}$$

で定義する.

$$(x, x'; m) = \begin{cases} \overbrace{xx' \cdots xx'}^{2m \text{ 個}} & m \equiv 0 \pmod{2} \\ \overbrace{xx' \cdots xx'x}^{2m \text{ 個}} & m \equiv 1 \pmod{2} \end{cases}$$

とする.

#### 定理 4

$$\pi_1((\mathbb{C}^n \setminus M^0)/W) \cong F(x_i)/N(r_{ij})$$

ここで  $F(x_i)$  は  $x_i$  で生成される自由群,  $N(r_{ij})$  はその中で  $r_{ij}$  によつて生成される最小の正規部分群とする

これは  $\pi_1((\mathbb{C}^n \setminus M^0)/W)$  が  $W$  に対応する一般組み紐群となることを示している. このことは  $M$  が  $(C_0)$  をみたすとき, すなわち  $W$  が普通の Weyl 群のときには

Brieskorn によつて知られている.

この外,  $(C_0)$  の場合における Deligne の条件の  $(C_1)$  の場合への類似の下に  $\mathbb{C}^n \setminus M^0$  が  $K(\pi, 1)$  になることが示されるが, こゝでは省略する.